

現役法科大学院（ロースクール）院生さんたちに、うかがう！！

桜井芳生、と、学生さん

041101 著作権保持

[sakurai.yoshio@nifty.com](mailto:sakurai.yoshio@nifty.com)

<http://homepage3.nifty.com/sakuraiyoshio/>

桜井芳生です。過日、知り合いの学部生さんと、現役の某大学の法科大学院院生さんたちに、いろいろと質問させていただく会をひらかせていただきました。わたしたちだけがうかがっていてももったいない情報を多々ご教示いただきましたので、学生さんが、報告文をかいてくれました。ご参考になさってください。ただし、万一本文にあやまりなどあったとしても、当方としてはいっさい責任を負いません。

ご教示くださったみなさま、本当にありがとうございました。

#### 《法科大学院質問会》

こんにちは。私は、某国立大学の学部生（非法学系）です。

2004年9月のある日、某国立大学法科大学院に通う現役の院生の方数名と私の知り合いの先生とが、法科大学院についての質問会を設けて下さいました。その会合で、法科大学院（以下、LS）入試対策の立て方や新司法試験についてお話を伺ったので、ここで報告したいと思います。

LS入試では、適性試験・小論文・ステイトメント（ここでは、応募理由書も含む）・面接の四つが重要な要素なので、まず、それらについて伺ったことを書きます。その後、新司法試験について伺ったことを書きます。

#### 【適性試験について】

法科大学院を受験する際には、法科大学院適性試験という試験を受けなければなりません。この試験は、各LSの個別入試がある年の前年の夏頃に実施されます。アメリカ合衆国などのLS入試で行われるLSATという試験を真似たもので、論理的思考力を測定するためのテストです。日本では、大学入試センター主催のものと日弁連主催のものとの二種類があり、この二つは、かなり問題の傾向が違います。ほとんどのLSは、大学入試センター実施の試験を重視しています。

私がお話を伺った院生の方々は、LS設置初年度の受験だったので、「過去問」というものが存在しない状況のなかで適性試験を受験されたこととなります。「公務員試験の判断推理と異質なものだ」「予備校の対策が役に立たなかった」といった

意見があり、過去問のない初年度がいかにも大変なものだったかが察せられます。ただ、「LS 設置二年目である今年からは、過去問があるので、予備校の対策は進歩していくのではないか」という意見もありました。

「どのようにしたら適性試験を解けるようになるか」ときいてみると、「たくさん問題演習して、とにかく慣れるべき」「100 問、200 問と解いていくうちに、自然に解き方が身に付いた」「論理パズルを解くときは、論理式をつなげていこうとするのではなく、表をつくったほうがよい場合が多い」とのことでした。

「LS 適性試験というのは、一見対策の立てようがない試験のように思えるが、試験である以上、方法を間違えずに勉強すれば、ある程度までは点数を取れるようになる」との意見もありました。

### 【小論文について】

小論文対策を立てる際、「9 月から 11 月頃まで伊藤塾の小論文講座に通っていた」という方がおられました。その方がいうには、「小論文テストの点数は悪く、付け焼刃では対策を立てられないと分かった」とのことでした。そこでどうしたかというところ、「新聞のスクラップブックをつくったり、NHK で夜 11:50 から放映されている『明日を読む』をノートにとったりした」のだそうです。「この対策は効いたと思っている」とおっしゃっていました。

また、「公務員試験小論文対策用の本が役に立つ」という方もおられました。その方によると、「大学入試小論文用の参考書は、駿台のもののような例外はあるが、たいてい幼稚すぎて役に立たない」そうです。ではどうしたかというところ、「公務員試験小論文対策用の本を 5・6 冊買って読み込み、理想的な小論文のフォーマットを頭の中につくっておいた」といいます。つまり、「このテーマに対しては大体こういう論じ方をしていけばいい、あのテーマに対してはあんな風に論じていくといい」といった準備をしておくわけですね。「そのようにして勉強した社会問題の知識・論の進め方が、面接でも役に立つ」ということでした。

実際に小論文を書く練習はどのようにしたかというところ、「12 月あたりから本格的に小論文演習を始めた。週一回小論文の問題を解くことを、三ヶ月間繰り返した」「出来上がった小論文答案は口の悪い友人に見せ、批評してもらった」「東大・京大の入試赤本に載っている小論文問題を解くと、力がつく」ということでした。

また、「予備校の先生が書くような模範答案よりも、実際の LS 合格者や予備校の小論文模試の成績優秀者が書く答案のほうが、はるかにいい出来」なのだそうです。

「法律家に気に入られるような文章を書くべき」という指摘もありました。「『この論文を書いた奴は、法律ができそうぞ』と読み手（LS の先生方）に思わせるような文章を書くべき」だということです。といっても、「判決文・条文などによくみられるような一文がやたらに長い文章を書け」という意味では決してないとい

うことです。このお話を聞いた翌日に思い出したのですが、以前私が受講した民事訴訟法の講義中に、教授（司法試験合格者）が、『日本語の作文技術』（本多勝一、1982、朝日文庫）と『理科系の作文技術』（木下是雄、1981、中公新書）の二冊を、「これは良い文章読本だ」といって薦めておられました。どちらの本も、「論理的な文章・自分の考えが相手に伝わる文章を書く」という主旨です。このような本が目指す文章のスタイルが、「法律家の気に入る文章」のスタイルということになるのかもしれませんが。

蛇足ですが、私自身も『日本語の作文技術』はおすすめします。「読点をどのようにつけばよいか」「修飾語をどのような順番で配置すればよいか」といった疑問に答えてくれたのは、この本でした。

#### 【ステイトメント・面接について】

ステイトメント・面接については、民間企業への就職活動における対策がほとんどそのまま使えるのではないかと思います。院生の方々も、『自分は学生時代にこんなスゴイことやりました』といえるようなことを実際にやっておき、そのエピソードをステイトメント・面接のネタにする」「パンフレットなどを使って、自分の受験するLSと他LSとの違いを探し出し、『こちらのLSには、他校と違って、このような長所があります。だからこそ、こちらのLSに入りたいのです』という主張を匂わせるようにする」「ステイトメントはコピーしてとっておき、そのコピーを参照しつつ面接対策を立てる」といっておられました。

いわゆる「質問トラップ」を仕掛けた方もおられました。「質問トラップ」とは、ステイトメントなどの書類の自己PR欄を書く際に、質問されやすいような隙をわざとつくり、面接の段階で面接官が自分の思い通りの質問をしてくるように仕向ける方法です。

「自己PRは、とにかく、がめつく・あつかましくやるべき」ということでした。

#### 【新司法試験について】

現行の司法試験は、何回でも受験することができ、合格率は2・3パーセント程度です。

新司法試験は、LS卒業後5年以内に3回以内の受験回数で合格しなければ、受験資格を失います。合格率については、辰巳法律研究所が、17から27パーセント程度になると推測しています。私がお話を伺った院生の方も、「新司法試験合格率は、20パーセント前後だろう」といっていました。LS設置当初の政府発表では「新司法試験合格率を5割程度にする」ということでしたが、どうやら、新司法試験はかなりきびしくなりそうです。

## 【その他】

院生の方々から、質問会の最後に以下のようなアドバイスをいただきました。

「情報収集を徹底すべき。いろんな予備校のパンフレットが家に届くようにする」「受験仲間を集めて、情報交換したり、一緒に勉強したりする」「自分の受ける法科大学院の教授について情報を集める。教授がHPを開いているなら、それもチェックする」「法律の勉強は、入学前からやっておくべき」「法学検定・TOEIC・TOEFLといった資格を取っておいたほうが、断然有利（ちなみに、法学検定を「資格」欄に書かれた、法学部卒の方もおられました）」

以上、質問会で出た話題の中から重要な部分をご紹介します。質問会を開いてくださった皆様に感謝しつつ、この報告を終えたいと思います。